Pun 翻訳の比較検討：「不思議の国のアリス」の場合

小　林　絢　子

伝統的なフレームワークを使った夢物語である「不思議の国のアリス」(以下「アリス」) は奇想天外な登場人物や筋は子供向きではあろうが、その奥の深い、重層的なユーモアや英語に対する洞察力の鋭さは大人の読者の関心の的ともなってきた。マーティン・ガードナーの *The Annotated Alice* には欧米で出版された「アリス」やルイス・キャロルに関する批評書や注釈書が精神分析関係、論理学・数学関係を含めて50冊近く紹介されている。(1)

日本でも和訳と同時にその文体、語法、パラドックス、パロディーその他内容的に構造や背景に迫ったものなど注釈書や解説書が数多く出版されている。(2) それらを分類整理するだけでも一仕事であるが、そうかといって、この物語をただ難しい研究対象としてとりあげるのは著者キャロル (本名 Charles Dodgson) の意図した所ではないであろう。単語、語法、論理すべてのレベルで駄洒落や屁理屈、原典のパロディー等が駆使され、巨視的に見ればヴィクトリア朝の人々がとらわれていた (そして人間だれもが社会生活をしている中でとらわれている) 社会的枠組みが揶揄の対象となっている。それがほんの7才前後の少女アリスと他の登場人物との会話やアリスの思考回路の記述によって興味深く提示されているのである。そこの所を日本語訳ではどのように表現しているか、日本語訳だけしか読まない読者にどの位理解してもらえるように工夫しているか、ということを見ていきたい。Pun (= the humorous use of a word, or of different words sounded alike, so as to play on the various meanings: *Webster New World Dictionary*, 1979) は日本語では「地口・駄洒落・語呂合わせ」等と訳され

ているが、もっと広く文体のもじりや論理の転換を含む場合もあるので、今回はその広くとらえた面から検討をはじめることにする。

「しゃれ」や「もじり」は元来、原語以外の言語に訳されてしまうとほとんど風味を失ってしまう。ユーモアも翻訳不可能な場合が多いことはシェークスピア劇等の翻訳でよく知られていることである。pun が書かれた原語の面白さを保ったままできるだけ正確に訳す、という事が翻訳者の腕の見せ所であることはいうまでもないが、英語と日本語それぞれの持つ文化があまりに異なるので、その妙味を伝えるのはなかなかに難しい。それらをどのように扱っているか、どのような努力と工夫が翻訳に見られるか、という点を数多い「アリス」の翻訳書のうち主なもの9点を取り上げてさまざまレベルで比較してみよう。

まず、年代順に最も古いものから順番にこの本の翻訳をする際の訳者の姿勢を概観する。

(A) 福島正実訳[3] (1975年)：本書以前に岩崎民平訳がすでに出されていたにもかかわらず、自分の訳を出すことについて、福島は「翻訳というものは一定の寿命がある」と信じている、とその「あとがき」に書いている。つまり、時代遅れになった訳は原作の価値を伝えにくくするというのである。[4] 翻訳というものは新鮮であることが望ましいのであって、その後多くの翻訳の出た「アリス」のような作品は貴重な原石だといえる。

(B) 石川澄子訳[5] (1980年)：これは前出のマーティン・ガードナーの注釈のついた「アリス」をその注釈共々和訳したものである。ガードナーはアリスのジョークは現代の英国人や米国人にすら通じないことが多くなっていることをふまえ、その象徴解釈が余り独善的に、また多岐にわたらないように注意しつつできるだけ詳しく解説し、大人と子供を問わず、「アリス」の面白さの神髄を理解させようとつとめている。翻訳者はそのガードナーの姿勢を忠実にたもって細部まで行き届いた翻訳をしている。

(C) 高橋康也・迪訳[6] S. ベケットの研究者であり「ノンセンス大全」(晶文社) の著者でもある高橋は「アリス」の翻訳を新書館版 (1985年) と河出

書房新社版（1988年）の2通り出している。訳文の内容は変わらないが、後者の欄外に詳註をつけたことからも訳者が説明の必要性を後年より多く感じるようになっていたことはたしかであろう。

（D）高杉一郎訳[7]（1986年）この本は少年少女向けの「青い鳥庫」のひとつなので、比較検討の対象にならないかと思ったが、省略もなく過度に幼い表現もない。わかりやすく、解説も詳しい親切な翻訳書である。

（E）北村太郎訳（1987年）北村は自らの翻訳の特徴として、アリスの1人称に「あたし」を使って、その上品さを故意に打ち消した、といっている。[8] 他の翻訳本にある「わたし」と北村のいう「あたし」ではそんなに差はないように思えるが、彼は「子どもことばの文語体」による訳が多すぎたから、自分は「子どもことばの口語体」にした、と言っている。

（F）柳瀬尚紀訳[9]（1987年）これは定訳ともいわれているが、やや固い日本語で書かれている。柳瀬自身も「訳者あとがき」で中学生以上のおとなを意識して翻訳にあたったといっている。この翻訳書以前に出した児童文学全集用の「アリス」の部分訳よりも大人向けにするために、例えば「です、ます」体をやめて「だ、である」体を採用した、とも述べている。[10] ちなみに他の翻訳書はE（＝北村訳）以外は「です」体である。

（G）矢川澄子訳[11]（1994年）この翻訳書では英国で「アリス」の定番となっていたジョン・テニエールの挿し絵にとって変わって大画家金子國義の挿し絵が採用されている点が他のそれまでの翻訳書と違っている。

（H）脇明子訳[12]（2000年）いわゆる言葉遊びや、当事者にしかわからない冗談の翻訳には苦労した、と脇は「あとがき」で述べている。例えば糖蜜の井戸の底に住む三姉妹の名前のためにアリス姉妹の名前のもじったものが使われている場合などは翻訳してしまうと全く面白くない。「原文の冗談をそのまま伝えられない所は別の冗談におきかえる工夫をした」[13] と脇はいっている。

（I）山形浩生訳[14]（2003年）山形はそれまでの翻訳と趣きをかえるため、彼自身の言葉によると「自然にしよう」とした。説明の所は口ぶりを変えた

ことを示すためにカッコに入れたり、[15] 原文で強調の斜字体になっている所を日本字ではゴチック体にしたりしている。また、訳本原稿をインターネットで見られるようにしている、と述べている。

「アリス」が大人の読者をも惹きつけるのはまず、大人達が子供の頃にもっていた、現在は忘れている純粋さ、率直さをアリスが持っている点にあると思われる。この物語の最初の章で、アリスがウサギの穴に落ちていく時、その恐怖よりも、地球の反対側に出てしまったら自分が逆さに歩くことになるのではないか、という好奇心を持つことや、最後の章でトランプの女王や兵隊達に「あなたたちなんかただのトランプじゃないの」(You're nothing but a pack of cards!) と恐ろしさにもめげず、つい真実の事を言ってしまう潔さは現実の世、または大人の世界ではなかなか持ち得ないものである。しかし、このような事は英語の原文を日本語に訳しても日本人の感興を減ずるものではないので、ここでは論じない。

また、G 訳の箇所でも触れたようないわゆる inside joke（仲間内だけしか通じないような冗談）も翻訳では限界があって面白さがどうしても伝わらないので除外しなければならない。例えば 2 章に登場する Duck, Dodo, Lory, Eaglet がそれぞれ著者の友人、著者自身、アリスの姉妹であることや著者の名前が本名のラテン語名の逆転であることなどがその例である。[16]

ここで問題としたいのは、ヴィクトリア朝イギリスのオックスフォード大学という環境以外でもわかる言葉や文章の上での pun や掛詞の面白さを翻訳でどの程度まで表せるか、ということである。

まず、単なる語呂合わせというより、英語でいうと面白い理屈や表現が日本語ではどうなるかということを見てみよう。第7章「気ちがいのお茶会」(A Mad Tea Party) で気ちがいの帽子屋はアリスにまだお茶を飲ませてもいないのに "Take some more tea." と熱心に言う。おなかもすき、喉もかわいていたのにそれまでお茶をすすめられていなかったアリスは少しむっとして "I've had nothing yet … so I can't take more." と答える。する

と帽子屋は "You mean you can't take less," さらに "it's very easy to take more than nothing" と言い募る。「何もないところから、更により少なくとる（飲む）のはむづかしいけれど、何もない（飲んでいない）以上のものをとる（飲む）のはやさしいではないか」とそれまで何もアリスにとらせなかった（飲ませなかった）非礼を棚にあげて、アリスの抗弁の仕方をからかうのである。この部分の各訳は以下の通りである。

A 「あんたのいうのは、もっと少なくは飲めないという意味だろう？」
… 「ゼロよりもっと多く飲むのはわけないじゃないか」p.99

B 「あんたはまだなんにも口にいれていないのに、なんにもよりもっと少ない馳走には与れんといいたいんだろう。 もっと多く飲み食いするのはわけないじゃないか。」 p.111

C 「もっと少しは飲めないっていうつもりなんじゃろう。」… 「ゼロよりたくさんというのなら、いともやさしいからな。」 p.126

D 「もっとすくなく飲むことはできないっていう意味だろ」… 「ゼロよりもっと多く飲むことなんて、ごくかんたんだよ。」p.121

E 「ゼロよりもっと少なく飲むなんてできないっていいたいんだろうよ。
… ゼロよりもっとたくさんなら、かんたんじゃないか。」p.121

F 「もっと少なくなんか飲めないというんだね。… ぜんぜんよりもっと多くを飲むのはやさしいじゃないか。」p.104

G 「ひとつものんでないのに、それ以上のむってわけにもいかないやね。
… もっとのめってのならばお安いご用じゃないか。」p.104

H 「もっと<u>少なく</u>飲むのば無理だと言いたいんだね。… <u>なんにも</u>よりたくさん飲むのなら簡単な話だからな」p.127

I 「もっと少なくは飲めない、だろ。何も飲んでないならゼロよりもっと飲むなんて、簡単だあ」p.136

nothing をゼロと訳したほうが（A, C, D, E, I）、ゼロより多く（more）、ゼロより少なく（less）、という対比ができて pun として面白いと思うが、A,

D は「(ゼロよりもっと多く) 飲む」と「飲む」をくり返してしまっているので、less と more の対照がぼけてしまって、冗談がわかりにくい。C は2つ目の「もっと」が抜けているばかりに日本語として意味が曖昧になってしまっている。nothing を「ぜんぜん」(F) とか「なんにも」(H) と訳すと更にわけがわからなくなる。従ってここは E と I の訳が more than nothing と less than nothing の対比をより良くとらえているということになる。

同じく less ではあるが lessons と lessens の違いについての pun は第9章「ウミガメモドキの話」(The Mock Turtle's Story) に出てくる。海底の学校の授業 (lessons) が初日は10時間、次の日は9時間、その次の日はもう1時間少なくなるという時間表で行われているという Mock Turtle の話をきいてアリスが不思議がると Gryphon は "That's the reason they're called lessons, … because they lessen from day to day." とすまして答える。母音1音の違いを無視することによって生じる面白さは、日本語ではなかなか上手に表せない。

A 1日ごとに少なくなっていくというわけさ。[lesson (授業) と lessen (少なくする) とのもじり] p.134

B 毎日、勉強に時間を喰えば、だんだんへるの、あたり前だろ p.142

C だからおさらいっていうのさ。毎日さらうたびに減っていくからね。p.171

D だからレッスンっていうのさ。毎日、毎日時間がレッスンすくなくなっていくからな。p.164

E 1日1日と減っていくんだからな。p.162

F 毎日、時間が減ずるから時減というわけだ。 p.136

G そりゃお勉強だもの、少しずつおまけしますってわけさ。p.135

H だからお勉強というのさ。売れゆきが悪いと、どんどん割引になるだろ。p.170

I え、そのまんまじゃん。 日ごとに割っていくわけ。 p.183

各訳に工夫がみられるが、英語の意味を最もよく生かそうとしたFのような訳でさえ、「時限」を「時減」と書き表さなければならなかったのは苦しい。Bの「(時間を)喰う」という訳はかなり日英両語の特色をよくとらえている。そして、ここの英語の冗談と全く異なる、しかし、日本語としては充分に通用する冗談となっている訳は「さらう」と訳したCと「売れ行きが悪いとお勉強というから、割引になる」という言い方に変えているHである。しかし、「割引」を「お勉強」という習慣は日本語として長続きしないであろう。その他の訳ではルビをふったり、解説を付記したりしている。

Mock Turtle を海の学校で教えてくれた海亀先生についての話のところでは有名な taught us --- tortoise の語呂合わせのしゃれが出てくる。海亀先生は陸亀でなく海亀なのだから turtle (海亀) なのに、自分達は tortoise (陸亀) と呼んでいたというのである。tortoise が taught us という語句と同じ発音だから、というわけである。その同音異義の面白さを Mock Turtle は何気なさそうに 'We called him Tortoise because he taught us."と述べている。日本語訳では次の3種類の傾向が見られる。
(初めの2語はそれぞれ turtle, tortoise の和訳である。)

まず、日本語でも語呂合わせをして、その味を伝えようとしているもの。

B　海亀―陸亀：　先生は生徒達にかんで含めるように懇切ていねいにおしえてくれるだろ。だから尊い師じゃないか。p.138

F　海亀―地亀：　先生ってのはたいてい近目に決まっとるじゃないか。p.133

次に、少し冗談をずらして、無理にでもしゃれにしようとしているもの。

G　ウミガメーゼニガメ：　だって、ぜにかねとって勉強教えるじゃないか。 p.131

I　おばあさんガメーオスガメ：　すが目だったからに決まってるではな

いの。だからおすがめ　p.180

その他の訳ではルビや下線や注釈の助けを借りている。

A　海亀—陸亀：　そりゃ先生が勉強を教えてくれたからそう呼んだんだよ。p.130

C　ウミガメ—カメ：　わたしたちの知識をたかめてくれるからメと呼んだんだよ。p.166

D　うみがめ—かめ：　おれたちを教えてくれたからさ。p.158
（註付き）p.158

E　ウミガメ—オカガメ：　ぼくらに教えたからオカガメっていうんだい。
（註付き）

H　海亀—陸亀：　わたしたちを教えていたからに決まっておる。p. 166

同じく同音異義語の問題であるが、purpose（目的）と porpoise（いるか）は聞いただけではどちらの意味かわからないことがある。アリスと Mock Turtle の対話はそのことが原因でこんがらかってくる。Mock Turtle は魚たちが旅行に行くといったとすれば、自分は「何の porpoise で？」と訊ねる、というのだ。アリスは「それは purpose の間違いでしょう？」と問う。("Why if a fish came to me, and told me he was going a journey, I should say 'With what porpoise?'" "Don't you mean 'purpose'?" said Alice. "I mean what I say, " The Mock Turtle replied in an offended tone.)

A　何のいるかで？　それ、『何の用事で』のことじゃないの？(Purpoise［いるか］と purpose［目的］のかけことば) p.144

B　何で参るか？　なんの用事で行くかってこと？ p.150

C　「いるか？」を否定すれば「いない」ことになってしまう。
「イルカ」と「いるか」はちがうんじゃにの？ P.183

D　どんないるかといっしょに？　何用でいくのかね？ p.176

E　どんなイルカ(ポーパス)と？　イルカ(ポーパス)じゃなくて目的(パーパス)っていうイミなんだろ？ P.172

F　どこの海豚？『どこにいるか』でしょ？ P.145

G　<どこイルか？> <どこ行くか>ってことじゃない？ P.143

H　いかなるイルカ(ポーポス)で？ あなたが言ってるのは目的(パーポス)の」こと？ p.182

I　うるせーな、ヤリイカ　それって「わりぃか」ってこと？ p.198

これらの訳の場合、アリスと Mock Turtle のことばのかけちがいをユーモアをこめてあらわしているのは、F と G、上手に和訳されているが面白味に欠けるのが B と I、理屈がすぎて面白さがないのが C,　註やルビにたよっているのが D, E と H ということになろう。

同一の綴り字で意味が2通りある bite と fit の場合を見てみよう。
弟9章で、からし (mustard) が動物、植物、鉱物のうちのどれに属するか正確には知らなかったアリスと公爵夫人の対話に bite という語が出てくる。からしを一時鉱物と思い違いした公爵夫人が、からしの鉱山 (mustard-mine) に言及し、その mine を代名詞の mine と更に勘違いしていくおかしさが語られている場面である。その会話の間中アリスはフラミンゴを抱えていたのでそれが噛み付く(bite)ということと、からしがピリピリ辛い (bite) ということを掛詞にしている。公爵夫人の "flamingoes and mustard both bite" という台詞は：

A　紅鶴もからしもぴりりとくる p.123

B　フラミンゴとからしはかみつきます　p.131

C (人に) かみつく　p.157

D　フラミンゴとからしはどっちもぴりっとかみつくからね p.151

E　フラミンゴもからしも噛むんだよ p.148

F　フラミンゴもマスタードも口に噛みつくから p.125

G　フラミンゴも芥子もつんつんつつくでしょ p.125

H　フラミンゴはつつく、カラシはひりつく p.156

I　フラミンゴとカラシはどっちもピリピリしてますからねえ p.170
のように和訳されている。Eに代表される「フラミンゴとからしは共に噛みつく」という訳は正確ではあろうが、これでは後にからしの鉱山の冗談をいう前提としてのからしを無理にここで出してくる意図がはっきりしない。公爵夫人の顎がアリスの肩にぶつかって痛い、アリスが抱えているフラミンゴは刺激をするとつっつくので痛い、という状況からみるとGまたはIのようにフラミンゴも芥子も「つんつんつつく」という訳がこの場合最適である。

Fit（名詞「発作」：動詞「適する」）はそれを口にする王様自身が "It's a pun!" と叫ばなくてはならないほどその面白味は感知されにくい状況で使われている（第12章）。従って多くの訳（A,B,C,D）が注釈をつけている。この場面はトランプのジャックがパイを盗んだか否かという裁判で王が王妃の機嫌をとりつつ判決を下そうとしているところである。("you never had fits, my dear, I think? … Then the words don't fit you. …It's a pun.")
この駄洒落の意味が最も汲み取りやすいのはEで「おまえ発作（フィット）なんか起こしたことなかったね、たしか？・・・するとさっきの詩の行はおまえにぴったり（フィット）しないわけだな・・・しゃれをいったのに、もー」（p.208）のように訳されている。註もルビもなくてわかりやすい訳はGで「（<彼女がかんしゃくを起こさぬうちは>だろう）・・・王妃やそなたはかんしゃくおこしたことなんぞ、なかったねぇ？・・・それじゃこの詩にカンシャもしてないってことか・・・しゃれだよ、いまのは」（p.171）。苦し紛れで意味不明の訳はIで「妻よ、おまえは癇癪など起こしたことはないと思うが？・・・ではこの詩があてはまらなくてかんしゃ（く）しよう・・・しゃれじゃ！」と大変無理をしている。

この癇癪持ちの女王（王妃）に関して、もう1例punを追加する。英語独特の言い回しの差によって庭師たちの命が左右されそうになる場面である。(第8章)　「庭師たちを死刑にせよ」と命令した後、女王は "Are their

heads off?" とたずねる。兵士たちは "Their heads are gone." と答える。gone は庭師たちの首がなくなったことと彼らが逃げてしまったことの両方に受け取れるので、(赤バラと白バラを間違えて植えてしまったという軽い罪を犯した庭師たちを兵士たちが逃がしてやったことを知って) 読者は胸をなでおろす。そして gone と off の違いに気づかずに兵士たちの答に満足してしまった女王をひそかに笑う。女王の問と兵士たちの答は各訳では以下のようになっているが、一番あいまいに見える E が最も場面の雰囲気にあっているようである。

A　あの者どもの首をはねたか？ 首はなくなってしまいました、陛下。p.111
B　あのものどもの首をはねたか？　首ははねましてございます。p.121
C　あいつらの首をはねたか？　首は失せましてございます。　p.142
D　庭師たちの首ははねたか？　庭師たちの首は消えてなくなりました。p.135
E　首、はねたか?　やつらの首、なくなりましてございます、女王様。p.135
F　首は切ったか？　　首は失せましてござります、女王陛下。p.114
G　首は切ったかえ？　ぶっとびましてございます、陛下。p.114
H　ちゃんと片づけたか？　あとかたもなくきれいさっぱり片づいてございます。p.141
I　あやつらの首はちょん切ったか？ あのものどもの首は消えてしまいました。p.152

最後に英語と日本語の間の問題というより、英語の中だけである語句の意味ないし定義をはっきりさせようとして、かえって長たらしく混乱した説明になってしまう、という自家撞着について考える。このような現象は有名な言語学者 サミュエル・ジョンソンによる net の定義などでよく知られてい

るが、そのようなややこしい英文を日本語にしてその面白さを表わすのは容易なことではない。前出の説教好きの公爵夫人は第9章でアリスに "Be what you would seem to be"（直訳： 汝の見えたいと思うものであれ）と謎のような諺を言ったあと「簡単に言い換えると」と前置きして、次のように大変複雑な言い換えをする。

Never imagine yourself not to be otherwise than what it might appear to others that what you were or might have been was not otherwise than what you had been would have appeared to them to be otherwise.

この英文についてはマーティン・ガードナー(前出の *The Annotated Alice* の著者)ですらお手上げであって、これを日本語に訳すのは至難の技であるが、以下に各訳を紹介する。

A　汝がありしもの、またはありしやもしれざりしものは、他人には、汝のありたるものが、彼らにはさにあらずと見えしものにほかならずと見えしやもしれざざるものにほかならずと汝自身において考えうることなかれ。p,124

B　傍目に見える汝と、汝そのものとが違わないと空想するなかれ。嘗ての汝も、それから後の汝も、それより遥かの昔に傍目には汝そのものとは似て似つかぬものと見えしならん汝にほかならざりしなればなり。p.132

C　あなたがそうであったかまたはそうであり得たものはあなたが以前にそうであったところのものが人びとに別なものだと見えたであろうところのもの以外のものではないということがほかの人に見えるかもしれないもの以外のものではないと自分のことを想像してはならない。p.158

D　自分はほかの人々の目にうつっているものとはほかのものだとは思うな。自分がそうだったこと、あるいはそうだったかもしれないことは、自分がそうだったことがほかの人々の目にはほかのようにうつってい

たこととちがうわけではない。P.152

E　じぶん自身をほかのひとにみえるかもしれないものとはちがっていると想像してはならないのであって、ほかの人に見えるかもしれないものとはすなわち、おまえがそうであり、あるいはそうであったかもしれないものであり、それはすなわち、おまえがかつてそうであったところのものが、ほかのひとにちがうようにみえたであろうところのものにほかならない。p.150

F　自分がどうであったかもしくはどうであったかが他人にそうではないと見えたであろうものであることが他人にどう見えるかもしれない以外のものではないものであると自分を想像してはならない。p.126

G　おのれを他人の目にうつるであろうものと別のように思うな、というのは、かつてのおのれ、もしくはそうであったであろうおのれとは、すなわちかつて他人の目にはべつのように映っていたかもしれないものにほかならぬのだから。p.126

H　自分が他人の目に見えるのとは異なるものではないと思ってはならないのはあなたが何でありまた何でありえたかと異なることなくこれまで何であったかが他人にはそうではなく見えているかもしれないことと異なりはしない。p.156

I　昔の自分や、昔そうだったかもしれない自分は他人からはちがって見えたかもしれない自分以外の昔の自分ではなかったということが、他人にとって見えるかもしれないもの以外のものではないと自分のことを考えてはいけない。p.171

関係代名詞に導かれる節がどの先行詞にかかるかということを分析した上で訳をしてみても難しい文ではあるが、句読点を入れて区切ってみれば、一応日本語と英語の関係代名詞の数（省略もあるが）を合わせたうえで、意味を通じさせることはできる。例えばHでは「自分が他人の目にみえるのとは異なるものではないと思ってはならない」という命題は「あなたが何であり、

また、何でありえたか、という事と異なることなく」という事とイコールと考えることが許されるなら、少なくともここまでは意味がわかる。それが又「これまで何であったかが、他人にはそうではなく見えているかもしれない」ことと同じというのも頷ける。H は内容は理解不可能ではないのであるが、日本語が整理されていないのでわかりにくくなっているのである。D, G, I の訳はその点ややわかりやすいが、それぞれ別な理由でわかりにくくなっている。

アリスを取り巻く動物たちやトランプの国の人々が意図の分からないゲームやパーティーをしたり、整合性のないことを言う時は、アリスが心の中でそのことを指摘したり、例えばアリスが前述したように威張りやの女王に率いられる集団に対して「いくら威張ってもただのトランプの一団じゃないの」と批判しても、真実を衝いているが故の面白さは翻訳でも伝わる。つまり、地の文の面白さは説明的なので伝えることができる。言葉のレベルになると、今まで見てきたように、その掛け合いの妙はなかなか他国語に置き換えられない。劇だと仕種や声色で補うことも考えられるが、書物又は書物の中の会話ではルビや注釈に頼るしか、その面白さを味わうことはできないのであろうか。今回は文脈における pun の面白さを英語文の中から拾い上げ、その翻訳の難しさを見てきたが、工夫次第である程度はその妙味を伝えられることがわかった。「不思議の国のアリス」にはまだまだ単語そのものの使い方自体の面白さもあるので、またの機会にそれらも調べてみたいと思う。

註

(1) Gardner, Martin ed. (Lewis Carroll:) *The Annotated Alice*, Penguin Books, London, 2001 pp.321-8. には例えば、*Alice in Wonderland Psycho-Analyzed*, (A.M.E. Goldschmidt, New Oxford Outlook, May 1933)や Lewis Carroll: *Symbolic Logic* (William Warren Bartley Ⅲ, 1986) 等が掲げられている。

(2) 稲木昭子他著「アリスの英語」1 研究社 1994 pp.226-7.

(3) 福島正実訳 「不思議の国のアリス」 角川書店 1975

(4) 「前掲書」“あとがき”(pp.185-6) 参照。この福島の考えは阿刀田高により、北村太郎訳(集英社、1987) p.241 にも引用されている。

(5) 石川澄子訳 「不思議の国のアリス」東京図書 1980

(6) 高橋康也・迪 「不思議の国のアリス」新書館、河出書房新社 1985, 1988

(7) 高杉一郎訳 「ふしぎの国のアリス」青い鳥文庫、講談社 1986 漢字にはルビがふってある。

(8) 北村「前掲書」p.232. 1987年に王国社から出版したものを文庫版にしたものである。

(9) 梁瀬尚紀訳「不思議の国のアリス」ちくま文庫 1987

(10) 「同書」p.183.

(11) 矢川澄子訳「不思議の国のアリス」新潮社 1994

(12) 脇明子訳「不思議の国のアリス」岩波書店 2000

(13) 「同書」p.229.

(14) 山形浩生訳 「不思議の国のアリス」 朝日出版社 2003

(15) 「同書」 p.259.

(16) Gardner, p. 28, Note 9. 動物の命名については以下のような説明がある。まず、Dodo については "Dodo was intended as a caricature of himself — his stammer is said to have made him pronounce his name "Dodo-Dodgson." Duck については "The Duck is the Reverend Robinson Duckworth, who often accompanied Carroll on boating expeditions with the Liddell sisters." Lory については "The Lory, an Australian parrot, is Lorina, who was the eldest of the sisters." 作者の名については、本名 Charles Lutwidge Dodgson をラテン語化し、Calorus Ludovicus として、さらに逆転して英語に戻して Lewis Carroll とした,と説明している。福島「前掲書」p.182.